

給食センターだより

第 6 号

いただきますっ

白水学校給食センター

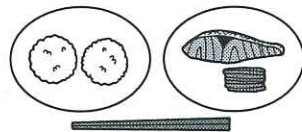
文責＊坂本麻美 R6(2024).1

1月24日～30日は 全国学校給食週間です

みなさんは、学校でお昼に給食を食べるのは当たり前だと思いませんか？学校給食は、子どもたちの元気な成長を願う、たくさんの人々の思いと長い歴史があります。全国には、毎日お弁当持参の学校もたくさんあります。24～30日は学校給食週間です。この機会に、学校給食の意味や歴史、裏で支えている人たちのことを知って、給食について考えてほしいです。

★学校給食は、どうやってはじまったの？

学校給食が始まって、今年で135年。明治22(1889)年に、山形県の忠愛小学校(当時はお寺)で、生活が苦しくてお弁当を持ってこれない子どもたちに食事を出したのが、はじまりでした。そのとき出されたものは、『おにぎり、鮭の塩焼き、つけもの』でした。



その後、子どもたちの「栄養を補うため」に、給食を提供することが全国各地へ広がりましたが、昭和16(1941)年ごろになると、戦争により食べものが不足したため、中断されました。戦後、子どもたちは栄養不足で、体は小さく、健康面でも心配されました。それを改善するために、ララやユニセフなどの海外の団体から、食べものの援助をもらい、給食はだんだんと再開されていきました。当時のメニューは、コッペパン、脱脂粉乳(粉ミルクのようなもの)などでした。



給食用の食べものの贈呈式がおこなわれたのが、昭和24(1946)年12月24日。冬休みと重なるため、この1ヶ月後の1月24日を『給食記念日』とし、そこから3の日までを給食週間としました。



★今や学校給食は、大切な教育活動！

今の給食は、体の健康を支えるだけでなく、

- 栄養バランスのと리카た
- 食に関する正しい知識を得る
- 望ましい食習慣を身につける
- 食文化や伝統を学ぶ
- 地域の食材や生産について学ぶ 他たくさん...

など、食を学ぶための『教科書』とされています。みなさんが、生涯にわたり健康でいきいきとした生活を送ってほしいからです。

食は心と体を作ります。それらが作られるのは、成長期の今です！



食べることにについて考えてみよう

毎日の給食がみなさんひとりひとりの口に届くまでに、どのくらいの時間がかかり、どのくらいの人々がたずさわっているのかを考えてみたことがありますか？

一食の向こう側

●田や畑、海や牧場で働く人



米や野菜を作ったり、牛や豚を育てたり、魚をとったりします。

●市場や八百屋、肉屋などで働く人



良い食材を選んで売ったり買ったり運んだりします。

●給食を作る人



献立を考えたり、安全に作ったりします。

●準備をする人



給食当番さん

給食が目の前に出てきたとき、あなたはどんなことを考えていますか？給食1食の向こう側には、たくさんの人々が、汗水流し、いっしょうけんめい働いてくれた姿があります。その人々のおかげで、わたしたちは食事をする事ができています。給食だけでなく、食べるときには、食事の向こう側にいる人たちのことを忘れないで食べてほしいと思います。

食べることは、生きること

今年は、年が明けたと同時に、能登半島地震が起きました。家族で楽しくお正月を過ごしていた人たちも多くいる中で起きた大地震。多くの人たちが巻き込まれ、今なお安否不明者の救出活動が続けられています。命が助かって、水やガス、電気のライフラインが途絶え、食べるものどころか、飲み水さえ不足している人たちがたくさんいます。それらの様子を見るたびに、心がいたみます。約8年前、ここ南阿蘇村でもおなじことがおこりました。

世界に目を向けると、戦争や紛争がおき、みなさんと同じ子どもたちやたくさんの人たちが亡くなったり、避難生活を強いられ食べ物や飲み物がない危機的な状況で何日も過ごしたりしています。

「食べることは、生きること」。わたしたちは、どんな人であれ、食べないと生きられません。食べなければ死んでしまいます。食べることで命を明日へとつないでいるのです。今みなさんは、学校に来れば給食が食べられ、おうちでも食事をする事ができます。いのちをつなぐ事ができています。そのありがたさをこの機会にもう一度考えてほしいと思います。震災はとつぜん起こります。その時その時、食べられていることを大事にしてほしいのです。